



きらめく風

すすんで学ぶ子ども 心ゆたかな子ども 体をきたえる子ども

「善・悪」か「快・不快」か

旭町小学校長 土屋 信行

人間は、それぞれが生まれ育った環境の中で様々なことを学び成長していきます。その成長過程で、「善・悪」の判断ができるようになるということはとても大切です。これがなければ、本来動物的である人間は本能の赴くままに行動し、人間社会は成り立たなくなってしまうでしょう。つまり、教育を受けることによって獲得される知性や理性といったものが欠かせないとということです。

現代の日本では、皆が教育を受けられる状況にあり、少なくとも「善・悪」の判断に関しては正しくできるのが当然と思われれます。しかし、実際はどうでしょう。凶悪な犯罪は増え続け、マナー・モラル・ルール等を見捨て、いろいろな場面で他者に迷惑をかけても平気な顔をしている人が数多くいます。

おそらく、そのような人は「善・悪」の判断で行動するのではなく、自分の「快・不快」の感覚によって行動を決定しているのではないのでしょうか。「善いこと・正しいことだと分かっているけど不快だからやらない・守らない」「悪いことだと分かっているけど快いことだから・面白いからやってしまう」仕事や勉強をしない、規則を守らない、いやがらせ、いじめ、様々な犯罪行為等がこれらにあたると思います。

子供たちがこのような大人にならないようにするには、まず身近にいる大人が、どんなにやりたいこと・好きなこと・得意なこと（快）であっても、やってはいけないこと・やってはいけないとき（悪）であれば、絶対にやらない。どんなにやりたくないこと・嫌いなこと・不得意なこと（不快）であっても、自分の責任でやらなければならないこと・やらなければならないとき（善・正）であれば、しっかりとやり通す。これらを繰り返し、率先垂範することによって、「善いこと・正しいことをすると快い」「悪いことをすると不快である」という感覚が、子供たちに育っていくのではないのでしょうか。

真面目であること、正直であることの尊さを子供たち自らが感じ取り、穏やかな気持ちで過ごせる学校でありたいと思っています。そして、そのような家庭・地域であってほしいと願っています。

